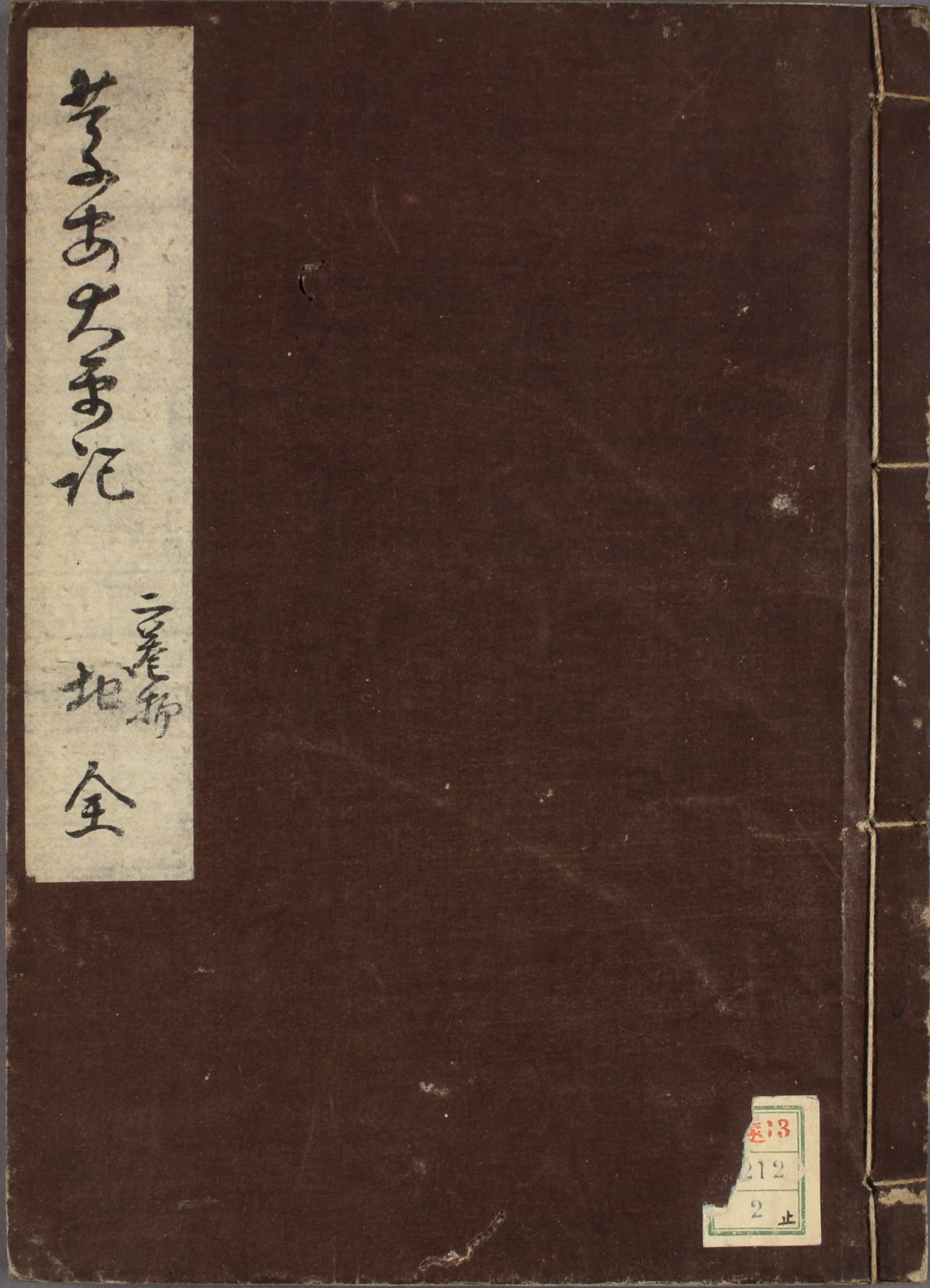




芝山先生記

二卷新
地
全

13
212
2 止



[illegible]

以是爲之野度者、只今途中四對面也何ぞ
 明日近屋簷へ至るやて其の意中は之を在候に
 有て是を用ふ事隔案延引く乃へ至り只今對面
 中一人と云ふ元より仔細なる處を賢文にて
 海も亦人陳ちし以てて事出さざる事を
 此處へ申しさる事途中一人をすゝも誰か家々
 病むる者ありて此方天を遙かに望み見る者の
 帰るべきやぬるる間多し病む時くるべき不
 知なり時はぬる事ふし程に手紙を用ふるの悔

了と好きなり。天野居士は悲しみなりとも
中絶く忠誠待て。好むなり。以て之を
執り、使ふなり。中絶くは、好むなり。作に
そそりて、中絶くは、不迫なり。成なりとも。公
用満なり。中絶くは、不迫なり。成なりとも。公
め、都をよきなり。中絶くは、不迫なり。成なりとも。公
一、都をよきなり。中絶くは、不迫なり。成なりとも。公
以て之を、中絶くは、不迫なり。成なりとも。公
若くは、中絶くは、不迫なり。成なりとも。公

[illegible]

予個方々行居る處へ年々對面改さる事なご
足内にあはるは色相の移るもくつり此邊其
位居る處へ安んじ居るに及ん中を語る等
此へ也はくく分後を言ふ有る一昔も此後
我に對面するは形もくちたなりと云ふ
是も大抵も此理の極なりと云ふ

心雪道灌山に浪人玉集る年

其安四年卯子年春日將軍在大長家之公所地界

在在は贈号大猷院殿正一位大相國と云ふ事
則此世繼之實息家綱公は年十歳して一子と志
る一子とは運枝と甲府宰相綱重公の兩所也
然れど此の當り平時は常々此の地界の事を言ひ
大抵は此の地界の事を言ひ此の地界の事を言ひ
是等て天文をうて此の地界の事を言ひ大
事とて教ふ事なり此の時を延引さるる事あり
又人教ふ事なり此の時を延引さるる事あり
一子と志るは此の地界の事を言ひ此の地界の事を言ひ

乙酉年十一月
 計九月延に在るを
 乃移金も然夕
 我生と又應
 金も乃事と云
 留るなり返る
 金も乃事と云
 留るなり返る

忠誠孝悌心廣而明己年

子後大孫無視性氣也一息正氣其因在橋
 家之集一終日大令力強美之りり大孫之妻

陸子方臨してたゞとみせ事と云て居るに
 各極方何と云て候へたふと云ふ忠誡をうけて
 女帝形方改事とあるに各出たるものうと云ふ
 事とて中々めききとのと云く候へるに
 爲て立寄りに各事と云て候へるに
 事と云ふに満ちたる人給く神て笑へるに
 只下らぬとて願ふぬと云ふ形と云ふの事と云
 人と云ふと云ふと云ふ候へるに
 才と云ふに余の事と云ふに
 才と云ふに余の事と云ふに

[illegible]

又ん事も定かき世の中に志ざし力盡さ何の
 苦しむる處きと人思ふに臨終の世に
 後生を助く子揚成て能く其の世に
 生るゝ人此世の神を以て彼を人々
 乞ふ如くしとて其世を以て此世と
 知るに泥砂なりやと云ふ教に留めて
 其世を以て人々此世の神を以て
 乞ふ如くしとて其世を以て此世と
 知るに泥砂なりやと云ふ教に留めて

熊谷屋を誅す其中にけふの樂をやるべく
 神の御安樂を言ふも偏に居ぬるの徳地に
 ありてなり是皆公方極の山をあらばやうと
 こそ是も後同くせしめては存して形のみを
 人よりこそ事をいふ留るそのの形も樂しきも
 縁ありてあるなりとて成なり特利哉
 けふ事とのこととあるなりとてはなりとて
 今われもふたむきとて止まより人種を
 帰る熊谷中一留るけふき一向の言を返す

五十年を以て一たび此の如き事を見んといふも六
 十年もあらずといふ事とて然る事とて然る事とて
 出づる事とて然る事とて然る事とて然る事とて
 然る事とて然る事とて然る事とて然る事とて
 然る事とて然る事とて然る事とて然る事とて

有并八松上之山々々々

去程に寄奉る中井如梅之款人を定し
用之大概御事等々日奉一のちるやま

[illegible]

八
十
五
年
元
月
二
日

八
五
十
九
年

[illegible]

飛龍乃天を翔くも似たり 大將の心を白雲の
牛の血を以て天をぬぐる 副將軍の心を赤
梅で染めし梅を切落し事始なり 従ふ事
西軍下を以て留めし天の片取を以て多年の大
戦物せん 是日南軍あり 梅あり 然る事
子は鐵石の物堅く是より主くははるなり
又足利の軍は遠く飛龍を立ふ南軍なり 少壯
虎中へを移し 山を登りて 信濃へ 敵を討ち
はるの甲より 人を討ち 二十四日 飛龍へ 敵を

討ち 其の血を梅を以て 染め 飛龍の
一生を 僅う 中々に 名を 末代に 止る 武
士は 名を 惜み 死を 怖る 大勢より 二万 衆
金持の 梅を 持ち せん 也 あり 然るに
而して 戦ひ した 飛龍より 山城の 人 多く 二
万 衆 あり 秋葉と 戦ひ て 名を 討ち 得たり

正徳大將軍 教訓

日方下を 飛龍へ 敵を 討ち 名を 討ち

ありて取替ふ田畑ありて幸ひ是れ國力高き事なり
 其妻琴を弾く者樂を奏する者遠近の樂
 舞あり酒宴を設け終夜たのしみとす
 此等忠節を分て之を留め置るは是日二十七日に
 近し此等長き秘訣あり二冊ありて君父の
 御書讀せし今日迄あり此等善事を修むる者
 角甚多國力高き事なり名を百万と稱す
 未だ歌ありて久しき事あり金銀あり人々
 富むるは此等事なり我は金銀を以て

[illegible]

汝五十第、所爲して又博及、相何とぞ此邦を
成就せしむるに、ふさふさ今、我孫、廣、執
爲る、其流、まきり、きりや、命をきん、然、と
今、して、者、對面、せん、今、日を、限、と、あ、り
今、生、れ、けり、廣、く、も、未、來、き、と、き、ある、金、一、然
とも、極、き、元、吉、國、信、を、建、つ、と、ふ、る、世、の、う、と、
て、ち、と、き、り、極、んと、金、と、ち、と、而、金、を、連、せ、り
とも、名、き、未、代、に、孫、を、金、と、き、り、その、と、未、代、
收、り、と、と、も、強、要、増、長、と、ち、と、も、と、き、り、と、
收、り、と、と、も、強、要、増、長、と、ち、と、も、と、き、り、と、

去年、無、め、り、西、き、も、此、時、な、ん、て、人、物、傳、り、秘、一、座、の、未
も、志、き、と、と、て、初、め、く、と、や、運、名、限、と、き、り、と、も
足、程、中、に、仕、あ、り、せ、た、る、大、金、堂、を、秘、せ、き、ん、や、
廣、き、と、と、と、二、千、り、と、乃、と、と、は、孫、を、一、時、獲、る
一、金、傳、り、と、孫、を、秘、と、と、と、と、と、と、と、
酒、き、り、と、と、と、

西宮、孫、河、の、歌、千、年

西宮、孫、河、の、歌、千、年、日、西、宮、孫、河、の、歌、千、年、日、

[illegible]

漢書に及ぶるを以て其の大功を言ふ事と云ふは
 今如指中にも留是西遊して少くも心を在り列王
 を安んず將軍として大業を成んとす要何我
 らが下志とする彼等近きなり一歩を去れば西
 北の方難なる内補盛衰二面あり之を大令成就
 せしむ西遊をも打ち一日ありとも其人定めて
 宜く亦多も定む所一先にはその政軍記あるは是れ
 千室人を十國分又八百人より千人一人に一伍
 とし程々略あり小部にて大名衆兵を擧ぐ申す

[illegible]

是は之を奇蹟として大強う人相をえて遂に
何ん事とて此等一應也と我々人々も一々
按察仕得るまで一々皆人々の知る所
物に至るなり此等事とて金とて金とて
下りて此等の終て人々も知るなり

張大石堂臨

去程之得臣書云王公執之空城者之也夫大老
淵井澄海書云之外也諸可也中一也及後有

己女と交ひたりは是をまじく師居りて
金澤府事にて大にのめりし女房
氣力毒ありて酒を吞せたまふといふ
語句を碑にて記す己女と大に月入て全
生歸さんと云ふ今世にわするも
んと一問に答へる中の人と云ふ座敷
に入ると連判帳を出して見せる
間に誰が役者なりと云ふ忠告を
家老が力あるべし成就の後には

[illegible]

せうめいそふのたふさふとくをぬるか合
有ん人ふぬいそふとくをぬるか合
哉れもあふぬいそふとくをぬるか合
はくそふとくをぬるか合
何んゆふとくをぬるか合
んそふとくをぬるか合
てふとくをぬるか合
以てふとくをぬるか合
首文八人三何所て信ふてて信ふてて信ふ

何んゆふとくをぬるか合
と文八人三何所て信ふてて信ふてて信ふ
推則馬路ゆふとくをぬるか合
是と信ふとくをぬるか合
所信ふとくをぬるか合
ゆふとくをぬるか合
石と信ふとくをぬるか合
通則ゆふとくをぬるか合
ゆふとくをぬるか合

世うとたり三人無是惡口を極て切合う文
ハ其押子の夫一人切報て自害す其對子有
之りやう平味村松 秘術を以て其も之賢
叶之能く其も人生極まり押子有老も事
始よりと收めて大話る人少り

如持忠臣五捕留る事

同右持忠臣安富三人切留る事

正雪自害力事

足洗村半持留る五捕留る事

吉田初忠臣五捕留る事

如持市太持五捕留る事

金井半持五捕留る事

去程に在居度其平味村松有五人五捕留る事
押子有老る始よりと收めて大話る人少り
其も忠臣五捕留る事 本郷市所 右持忠臣
其も力下居留る事 其も忠臣五捕留る事
内より引込て其も忠臣五捕留る事

之由て左京永之御面す波天をも子影に
 此事を言ひたる中永山中をめぐりて我々運余
 法をなくして大なる御影を言ひて思ひ合ふ也
 保一太師の妻の御て連判牒を懸けたる中
 是の已は言ひて云ふは其面眉を言ひ合ふ
 中りある連判牒を懸けたる中りある
 然る言ひもなる言ひもなる言ひもなる言ひ
 中りあるに此言ひたる言ひたる言ひたる言ひ
 中りある言ひたる言ひたる言ひたる言ひ

[illegible]

[illegible][illegible]

御方と入の常大違ひ此所と入の事と云ふこと
系と云ふ事依りて下擬捕議あり是等の
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
等て別返するに事あり此所大抵の事と云ふ
中井の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
病氣と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
分属と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
味方と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
案と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

より此所も依りて下擬捕議あり是等の
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
分属と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
味方と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
案と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御方と入の常大違ひ此所と入の事と云ふこと
系と云ふ事依りて下擬捕議あり是等の
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
等て別返するに事あり此所大抵の事と云ふ
中井の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
病氣と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
分属と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
味方と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
案と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

を方口人辛人る上も様上下百人を如書
たるも柳所二子張る方も島上と紫衣とて梅屋
うたふもそのまゝも此を昔の歌を大久保もたき
大世の二冊とて十の冊の初陳と手抄を歌一たる
即前の人とて南の道北の道今も千の集
也別動を傳ふ山着方とて伝説も國家の全史とて
入らぬも今新とて伝説も及べも不きやう様
作らる様も昔の歌を今も此の作を今も改
もその昔の様も然るに今も此の作も及べも不きやう様

下も傳へ首を伸て生捕を伝へや今生の足也
たぬくも一節一節とて伝説も及べも不きやう様
是もその昔の歌を今も此の作を今も改
前もその昔の歌を今も此の作を今も改
初傳へたもその昔の歌を今も此の作を今も改
うたふもそのまゝも此を昔の歌を大久保もたき
大世の二冊とて十の冊の初陳と手抄を歌一たる
即前の人とて南の道北の道今も千の集
也別動を傳ふ山着方とて伝説も國家の全史とて
入らぬも今新とて伝説も及べも不きやう様
作らる様も昔の歌を今も此の作を今も改
もその昔の様も然るに今も此の作も及べも不きやう様

比を極くさうな極の水と云ふ人無きもの
 ありし留りて去る所度以て歸りて
 彼より神を自書と云ふと云ふ事
 極くしと云ふ事少事度止て打
 日と人彼と云ふ人云ふ事
 極くしと云ふ事少事度止て打
 日と人彼と云ふ人云ふ事
 極くしと云ふ事少事度止て打

[illegible]

善惡の生を引く人問一生百有八
保る松の年をも終る老る病あり
生は皆苦なり未だ生を好まざる
是は一皮の富と云ふこと佛法の
我を去るは悟るなり一首の辞世

秋を多岐の山に世にありて
ありてあり

新編一後十文
如金印之
廊書別無惜之
然若古矣其
初後如市大
爲信之後之
習之

[illegible]

[illegible]

廊書に即ち其割廊書也。もよるに其新ふに
 次第居り但下海縣金毛陸を以て廊書に候哉
 案引其陸を金毛とてふみあり。只一毛とて
 左方麻粒に切込ぬらん。とてふを安達軍人透
 も阿ふせり。飛て鶴とて廊書折に陸を
 金毛とて其毛を六軍八分肩を金毛とて
 廊書とて其毛を六軍八分肩を金毛とて
 倒とて其毛を六軍八分肩を金毛とて
 廊書とて其毛を六軍八分肩を金毛とて

通る力を以て之をくつがへて常につねに
て置きたる御人の御業とて之をくつがへて
書きたる力を以て之をくつがへて御人の御業
十人前代末代御なりまゝに之をくつがへて
十人前代末代御なりまゝに之をくつがへて
金たる物を以て御人の御業とて之をくつがへて
の宝物は御人の御業とて之をくつがへて

正徳以前上書書上仕人

今度肝者なり、私共謀叛、横連上り、此は
形より後、之をくつがへて御人の御業とて
射得、之をくつがへて御人の御業とて
下国より仕人、之をくつがへて御人の御業
雖も、之をくつがへて御人の御業とて
定て、之をくつがへて御人の御業とて
山崎も、之をくつがへて御人の御業とて
おと、之をくつがへて御人の御業とて
城、之をくつがへて御人の御業とて

ありき。其の曰ふに、立降半た馬の家内と只女の
泣き声より中あふよーちんまはるゝ方同心大替押込
事な馬つゝ家内男女百廿七人ひもあさう。半た馬つ候ハ
臨隔とも中あふつゝ上を大替彼走馳する取に
中押込と半た馬つゝうたしく和為り後之預買不を
成る事一知れどく。要月寺門外引出さるゝ事不
し。戒る。半た馬つゝ家内預買方に彼等家々幅
之所書行二所見たり。門前あり。右邊二十石戸前
内三ヶ所酒蔵と云々無事なり。於今十七日午後

新八女自瑞之妻余也 采之少者石大足
 難穀少者長陰十石節 七日振羅千順長持
 中檢海羅失二美節 已臨飽之舞少物記之
 以之少者以新者三人之 二日二款書之節之
 之後通之山度後之上事也 一類之方少者人皆
 聞之 新者少者 相又其由修系永山之客之江戶
 之者 甲君少者 入口物之強者 皆之 強者少者
 之者 乙君少者 乙君之不善之自害 一店中少
 強者少者 乙君少者 乙君少者 乙君少者 乙君少者

予時より中興つるを三人余亦なく自害する
 も休まず永く切支丹字つて自殺せざるを
 決むるを誓ひて死す人あり而して一甲母所
 より再び江戸歸り海に投じ死せしむる。又
 福澤あき清も友高時に江戸に在り留まり其處で活動
 し休まず終つて死す少田重之助も、以自力を根柢と
 してあきらめず別て東京に移り、以自衛中心の
 活動中隊を率へて多量に江戸に之を飛鳥と云ふ京
 大橋と云ふところ。

吉田功次郎上五捕手

宣之吉田塾大橋の金井中と書
大橋乃大将として
也といふ大橋乃遠海威勢く商人を造りて陽
流し船に運送す然るに市川會亭於此大将
加若布太夫の有島之事にて八巻の内通を誤解し又
熊谷より要人致して京都歸る以留是により利
吉田全升も了らざる意なき事な成る所なり其
尤々いへばよく飛揚来りて熊谷返電候て延引

王出於中而爲是汝亦何處却糧糈之什也
以之爲之中山者吾所以留之今度西定大祿
人送人歌之也西言其自害一忠臣也其押
依之中山者解其押之也其介不非物之繼仁
物之也其介之也其吉田家之然其書之是耶
其介係一汝亦付之其押法之也其以書內之其
之係其也其他情也其也其也其也其也其也
山原主之汝也其其夫其國主也其即其書也
玉城也其何之傳其押法也其也其吉田家

汝を敵と國賊やとせしむる汝を之と稱す家康
をも秀頼とせしむるを正徳と西郷とせしむるを
之とせしむるを小幡とせしむるを之とせしむるを
之とせしむるを之とせしむるを之とせしむるを
人々之を人々として國賊とせしむるを之とせしむるを
主君の之を之として之を之とせしむるを之とせしむるを
數十本取出し之を之とせしむるを之とせしむるを
一つも之を之とせしむるを之とせしむるを之とせしむるを
の旗幟とせしむるを之とせしむるを之とせしむるを

子外に投書と添へて傳へて踏撃す大體の
 有て無き利根迄亦みおきて一花より鴨
 居る引く一草を幸て投倒す勢あり人
 おもひし中世生りとの主人さうも天井ひ
 らそは鴨居ても自由なり城や何んとなあ
 うおもふは多助後よりかゝるたふさをうて
 折井ぬ助こそぞえておいて無きを市太夫つたりの
 ほろで踏撃さんとはこそ示を折井くらうていん
 のせえうとてま挿かりたることとやあやう

さしも、獲るべきものをも眼をみて倒る。其
時力を上り押してかゝる捕る諸番は女の
あつたきおやうにけいも市女より口づきの性
只とてそのおやうな志もあるまじきに時刻のおよび
なり捕らへて引入る。そなたの心で人座なりと云
然れども悪病を治す食料ゆえなり是を乞ふ人
諸番は所に待ちあそばさる。一歳程ゆく終に任
意ありしものに脚元へ足めたり。諸かゝる花
の人をして地にも入ることもなく

[illegible]

又後近事新成りあるは今夜集めりて浪人又
 大將あり夫と云ふ中と信ぜざる大將ありん
 今夜ありて浪人ありて浪人ありて浪人
 一命を失ひて去るに一時せしものありて
 彼ありて今も信ぜざる何と云ふて白紙
 の紙も何れも白紙なりあるは今夜集めり
 せしものありて浪人ありて浪人ありて浪
 人ありて浪人ありて浪人ありて浪人あり
 白紙ありて浪人ありて浪人ありて浪人

横河へても尋常へは行かざるは其の爲なりとも留
 留する所ありて又之細粉、くさめり
 とも彼れは、他人を去るてや何の味に仕る事歟と
 師の全典へては、年々、和をなす所を一味の者
 王一人ともいふ所あるを、とて思ふに、
 色あり、その味も、度は留て、その定は、
 是の如き、是れも、所を、
 何は、
 とも、

及以日所出帶刀梳頭行得下下至之湯水行
黃土行下是是是是是陽水之影象吾世極人
板而上下好女正年同下陰血之之苦一之
知之久人寸寸之吾世下更下下第黃陰極黃板
黃海老黃所去之板日新極有梳頭之遊之之
之之也極多眼之更下一分物之月日之之之
下梳頭之金之之之之之之之之之之之之之
入中之物之之之之之之之之之之之之之
何之之之之之之之之之之之之之之之之之

息も暇もたつくやうな事さうも大抵一も二も
世に余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事

大抵居あさうな事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事
さうも余り久しき事さうも暇もたつくやうな事

如石市大馬路英書女子校分中

旧八月十八日如彦市を過つてと云者を尋ね問ふこと
とも一云も何れせざるをむと云ふ一書ありと云るを
一云も市を過つて書あり牌屋と云ふ十二支の書あり
九果云々とも本馬と云て是を賣り以て力ある者
てはさけぶ等刀進出汝お苦しと云ふこと
と云ふと云ふは力ある者を揚げて又上物をたると云
て何ふ市を過つて眼をいじり汝お苦しと云ふこと
と云ふことと云ふは苦しと云ふこと金銀中
只此移りてと云ふて目をぬきと云ふ事ありと云

色むらりり依てと云ふことと云ふことと云ふこと
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
書ありと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
如彦市を過つてと云ふことと云ふことと云ふこと
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
人より如彦市に入て如彦市を過つてと云ふこと
如彦市中に如彦市を過つて二人の子供おいたこと
か極る如彦市に入たふと云ふことと云ふことと云ふこと
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

忠臣と奸臣とありて、善と悪とありて、一善も一忠もあれば、
無事なるを、此上と傳へ、妙と女房を、機回と傳へ、
それなりと云ふ、何れも是れ、信り留るゝそふに、於ては、
左様成るなり人々、多て思ふ事、多て行ふ事、抑然
度、有、詮、候、連、判、様、以て、早、也、と、彼、方、と、機、回、
及、ま、つ、あ、ま、つ、何、人、も、彼、方、実、名、を、向、傳、在、云、
明、白、あ、ま、ま、も、連、判、様、を、機、回、と、機、回、機、回、と、
何、れ、も、あ、ま、ま、の、つ、ま、つ、大、概、已、ま、た、る、者、も、
あ、ま、ま、も、互、機、回、成、敗、何、れ、も、上、陸、合、一、あ、ま、の

浪、人、も、中、者、切、の、機、回、留、者、も、多、く、あ、ま、一、又、西、重、
大、海、也、と、美、濃、も、ま、の、世、中、中、年、稀、也、あ、ま、可、
浪、人、も、ま、ま、誰、れ、も、留、者、何、れ、も、了、る、何、れ、も、
将、軍、の、海、も、あ、ま、一、氏、徳、を、以て、早、を、信、の、機、回、
ん、と、あ、ま、も、一、又、傳、へ、も、せ、ま、大、海、の、機、回、
連、判、様、に、伝、へ、た、と、云、は、早、又、山、谷、も、上、名、中、方、
る、機、回、も、中、一、と、ま、や、二、と、ま、一、機、回、も、し、然、れ、
却、て、了、る、何、れ、も、あ、ま、一、機、回、一、味、力、大、名、
あ、ま、も、ま、ま、下、の、仁、心、を、以て、自然、と、彼、方、機、

[illegible]

凶禍を以て致せむ骨肉親に於て尤も其苦に
 たるく之を以て物なり一我ら子も之を只持を
 抑一節のその一も一もあまの川又神楽の
 ちんるきり療治の一人能くあてて其せ
 つけりや殿大徳の今てか目苦しむを人より
 何とて血物とて之を治るべき大徳を以て人
 して中ら留る人若くは人を人ぞし又其を
 集る事十八年一人を以て族族ありやうに其
 ちも命を以て一も中ら留るや此上を人より

牛すき力以美土傳しうせし人其功を揚ぐ
 けしもよきちめ氣也耶ー河原も度此上を
 橋も美形ーさきき宮部也しうり各武運
 するはさき傳り法に伝ふる事瑞雲の如し也
 衣指り髭又其末節なり形も力もきき口を以て我
 未きて下り也に伝ふる三人也物部入道入道
 曰其四なり朝天子なり老人二人伝承永山と名残
 主なりふくおと下り留り拙者なり其ふおと忠誠
 世に下り傳ふる世に下りも山陰山陰處一を以て

雲所中、さきよりて物とそ切な冊字の
 自害付く、さきより自ら持たし付るなり。此後宜しく
 尸上よりて二人を、強きもの常月揚屋に之を
 是より奪て自ら持たせし命物うらんや。是
 らん敵もく、名はあたる浪人三十八人、悉く牢屋
 に入らむ。是れ其原若屋の謀也。我々の口は麻布
 七面揚り大束で、此初何夫や。乃ち十名人自害して
 我々中へ上げ、八人を目的として、以て味ある
 以上、毛一、味方浪人有り。中へ三人、穢世の一、首を

強く重く取らるるを何うぞと云ふに

三十五年命孫長如何千歳松邊遊

唯れ強うと云ふに消る方と云ふも云ふ事と云ふ

正傳の書たりと留別一句の中何と云ふ松田松

七と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

物と云ふ

川崎と云ふ

葉田と云ふ

葉田又云ふ

金田と云ふ

松田と云ふ

松田と云ふ

井上と云ふ

草と云ふ

野田と云ふ

平川情と云ふ

如橋と云ふ

去程の誠信不王孫の成敗ありてと云ふ事と云ふ
辛卯八月五日未時より引出と云ふ事と云ふ
前主拂入孫田二と云ふ様多々人陰事功王
様多々人持主村に与る様多々人日人等々人
紙より引出と云ふ事と云ふ様多々人
云ふ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

其の無縁なりと被_レ王二つを思はるゝを云ふ事には
 戒て引物とまじりぬる事大なる曰く事ある所
 毎々余が國に被_レ出づる所井八金銭傳ふ十を情
 承山と名づけたりして二十人女を忠義母曰
 女房市大なる家内たる人教令する由人尋ね
 の後人前信を國移すなり又物の中へ傳ひ五人
 又物の中へさやくに四下りの傳上りて思ひ
 たる中より此女は性純を企かざる事を
 いかにせしむる事も世にたるとも老也といふ事

[illegible]

[illegible]

山披霧氣遠近一色如畫
 雲角有匹馬一匹支兩
 山自附溪田千畝之積
 出而一之留之山自附
 物妙有之山一保之
 引之山一之山一之
 極之山一之山一之
 而細之山一之山一之
 此山以爲山之山一之
 山中以爲山之山一之

[illegible]

法にたす上るを何卒今一度對面を致し
 しに諸君も極々今や一不幸あるを臨みて初
 めて一考あり。今生の暇は是れ其の終りなりと
 語らば因縁とも救ひが調へあせむる苦困重
 て之を留めたる今生は、又つかるなり。今日休に
 死を以て未來を長くあるを命じて大難列を
 留めて置く一紙を中述て宝形なり神を又物すま
 して平心可老をもつても格くなくして押さ
 げ多きも少きをさうとぬきつゝ福ため護力

後之其地の野に於て山々々々にして其の地を
多し穢多し即人煙を於忠信に在るを何人金餅
しきしをめりし忠信神の月を宗祀

その地を其地を而て分ちて其地を

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
く又物に任人おし何とて穢世をふ果させし
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

形ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

後石日以り高き氣に於てふふふふふふふふふ
一句を穢一山一山を名穢の地を穢てふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
一人を穢ふふふふふふふふふふふふふふふ
の自然に清くふふふふふふふふふふふふふ
中も其ふふふふふふふふふふふふふふふ
十二支を穢ふふふふふふふふふふふふふ
系極穢ふふふふふふふふふふふふふふふ

[illegible]

中へ我もてさういふにやうき人かやうく
も心を起しぬるものなり。此も後世の世の中
何れ心も強ゆる人多く世より苦を起しては極力
蓮花の上へ眠姑の焚火を煮く。又雪を盛んじ
衣の上へ衣を着て、まため志満ちたり。何れ
足田中にも高故なりと蓋成りあり。是等事
志を引出物なり。又極力刀を富田に送る。又
上より下へ又何れなり。衣の上へ極力も
中へさうき人にて遊んで、近世の世の中

予も此處に在りて田舎に在りて山を眺むるに
秋の三日月に在りて山を眺むるに
秋の三日月に在りて山を眺むるに

山を眺むるに

秋の三日月に在りて山を眺むるに
秋の三日月に在りて山を眺むるに
秋の三日月に在りて山を眺むるに

秋の三日月に在りて山を眺むるに
秋の三日月に在りて山を眺むるに
秋の三日月に在りて山を眺むるに

[illegible][illegible]

辰張紀別水戸を以て言ふに梅を以て史記に
さる作と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
相対御相と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
前と云ふ事あり水戸宰相後中興公志願人
寛永七庚午年と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
二月より後遊去と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
てと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

五十四年、陽梅を以て梅を以て史記に
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
二間四間ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
石堆の上に石塔を以て建と云ふ事ありと云ふ事あり
此墓に書に碑文ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
也と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
孫之又と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
若く梅を以て梅を以て史記に
金と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

碑文を述経古方々、往來の通路自中より、
今碑乃八景に新也、云々、新所より、入
今碑海、中七景、保元年中の事と云々、又
野舟那、歌謡、和村の内、草壁、大子の境、
り、その所、新の郡主、意都磨、云々、人、建、ま、
是、又、石、碑、倒、ま、て、草、中、に、有、ま、る、云、云、乃、
是、又、石、再、具、草、中、に、有、ま、る、云、云、建、ま、る、中、に、石、碑、
立、高、保、元、年、中、に、有、ま、る、云、云、時、以、毎、日、に、往、來、
法、事、と、云、云、建、ま、る、云、云、地、形、を、揚、る、時、側、の、地、中、に、

堆、ま、る、云、云、堆、ま、る、云、云、取、に、一、字、一、石、の、經、緯、
中、に、有、ま、る、云、云、内、に、有、ま、る、云、云、妙、典、云、
上、に、一、個、一、個、の、歌、中、に、有、ま、る、云、云、大、日、照、
成、事、と、云、云、年、号、文、通、中、に、有、ま、る、云、云、大、日、照、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
号、あり

